

世繼とか、四十條のさうしにて、延喜より堀川の先帝まではすこしまやかなり、又なにかしの、おとこの書き給へると聞き侍りし、今鏡に、後一條より高倉院までありしなめり、略下

〔後撰和歌集冬〕雪の朝老をなげきて
くろかみと雪との中のうきみればともかゝみをもつらしとぞ思
返し

兼輔朝臣

年ごとにまらがの敷をます鏡みるにぞ雪の友はしりける

〔袖中抄十五〕ともかゝみとみ雪〇歌略

顯照云、ともかゝみとは、わががみ、人のかみのまろきを雪にみあはする也

〔夫木和歌抄三十二〕六帖題鏡

衣笠内大臣

いくたびも心を見がけます。鏡うらにはかげのうつるものは

〔類聚名物考調度十〕友鏡ともかゝみ

合鏡の事なり、異説は僻事なり、後撰集冬貫之、黒髪と雪との中のうき見れば友鏡をもつらし

とぞ思ふ、略中抄、雪との中とは、髪と我との中なり、友かゝみとは、我と鏡の事なり、互に見えあ

ふにより、とも鏡といふなり、又ともかゝみは友鏡なり、いひかよはす友の二人がかゝみなり、

〔十六夜日記〕をしからぬ身ひとつは、やすくおもひすつれども、子をおもふ心のやみはなほまの

びがたく、みちをかへりみるうらみはやらんかたなく、さてもなほあづまのかめのかゝみにう

つさば、くもらぬかけもやあらはるゝとせめておもひあまりて、よろづのはかりをわすれ、身

をえうなきものになしはて、ゆくりもなくいざよふ月に、さそはれいでなんとぞおもひなり

ぬる

〔北史二十長孫道生傳〕紹遠、字師少名仁、寛容有大度、雅好墳籍、聰慧過人、略中疾甚、乃上遺表曰、謹案、中